

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

1日

元日

先勝 危

旧12月2日

水曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

どっ け じん に ゆう

毒気深入

しっ ぽん しん こ

失本心故

「毒気が深く入り、本心を失っている」

「毒気深入」とは、あらゆる煩惱が心の奥底に溜まり、毒が体中に回っているということです。

「失本心故」の「本心」とは、自分のことを考えず、大慈悲をもってあらゆる人に臨む仏さまの「本心」です。

煩惱を満足させるような教えでなければ見向きもせず、仏さまの「本心」に近づける法華経という良薬の効き目を疑うのは、「毒気深入 失本心故」の状態かもしれません。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

2日

友引 室

旧12月3日

木曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

是ぜ好こう良ろう薬やく  
今こん留る在ざい此し

「この良薬を今ここに留め置く」

医者である父親は良薬を調合し、毒に苦しむ子供たちの前に置きました。

どんな良薬でも、自らの意志で手に取って飲まなければ効かないものです。

法華経は有難いと崇めているだけではなく、自分も仏になれるのだと信じ、学び、実践しなければ、教えの力は現れてこないということです。

お釈迦さまがここに留め置いた良薬＝法華経を手に取り、口に入れるときは今なのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

3日

先負 壁

旧12月4日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

遣使還告 汝父已死

「父が死んだと」使いを送る」

父親は一計を案じ、他国へ出かけ、そこから使いを送り「父が死んだ」と伝えさせました。

子供たちは訃報を聞き、守り育ててくれた存在がなくなったことに気づき、これからは自らの力で生きていかなければならないと思いを新たにしました。

親を亡くしてその有難さがわかるのと同じです。仏さまの入滅とは、私たちが自ら真実の教えを手にするようにと促すための方便なのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

4日

仏滅 奎

旧12月5日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

常懷悲感

じょうえ ひ かん

心遂醒悟

しん すい しょうご

「常に悲感をいだいて、心遂に醒悟す」

父親の死を伝えられた子供たちは、悲しみの中で心が覚醒し、薬の色や香りが良いことに気づき、今まで迷いの底にいたことを知ったのです。大きな出来事に遭遇すると、ものを真剣に考えるようになり、モヤモヤとした迷いが消え去っていくということがあります。身内の死という大きな悲しみによって、初めて道を求め、教えを請う気持ちになるものです。それは悟りへの入口でもあるのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

5日

小寒

大安 婁

旧12月6日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

じん べん らい き

尋便来帰

げん し けん し

咸使見之

「父は帰り、子供たちと見まえる」

子供たちが回復したと聞いた父親は、家に帰り子供たちの前に姿を現します。

薬を飲み回復した子供と同じように、私たちも法華経という良薬を服し、迷いが晴れた後にはお釈迦さまに見まえることができます。

お釈迦さまの教えを信じ、自分も仏に成れるのだと信じ、仏道を歩んでいけば、お釈迦さまが私たちの心の中によみがえってこられるのです。私たちはいつでも仏さまと共にいるのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

6日

赤口 胃

旧12月7日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

こもう ざい

ふ

ほつ

ちや

せ

そん

虚妄罪不

否也

世尊

『嘘をついたのは罪か?』『罪ではありません』

お釈迦さまは「父親が旅先で死んだと嘘をついたことは罪になるか」と聴衆に問いました。

聴衆は「決して罪ではありません」と答えました。訃報を伝え子供たちを目覚めさせたのは慈悲の心によるものだと考えたからです。

お釈迦さまは久遠の昔から仏であり、入滅を繰り返しているのは、医師である父親と同じように衆生を目覚めさせるための方便であること説かれたのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

7

日

先勝 昂

旧12月8日

火曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

自我偈

「すべての仏法の中で最も大切な経文」

「自我偈」は、お釈迦さまのいのちが永遠であり、その救済もまた永遠であることが説かれている経文です。

そしてお釈迦さまが常住し、私たちが暮らしているこの娑婆世界もまた永遠の浄土であり、一心に法華経を信じることでお釈迦さまに見みえることができますと説かれています。

日蓮聖人はすべての仏さまの教えの中で最も大切な経文が自我偈であると述べられています。

妙法蓮華經如來壽量序品第十六

毒氣深入。失本心故。於此好色香藥。而謂不美。父作是念。此子可愍。為毒所中。心皆顛倒。雖見我喜。求索救療。如是好藥。而不肯服。我今當設方便。令服此藥。即作是言。汝等當知。我今衰老。死時已至。是好良藥。今留在此。汝可取服。勿憂不差。作是教已。復至佗國。遣使還告。汝父已死。是時諸子。聞父背喪。心大憂惱。而作是念。若父在者。慈愍我等。能見救護。今者捨我。遠喪佗國。自惟孤露。無復恃怙。常懷悲感。心遂醒悟。乃知此藥。色香味美。即取服之。毒病皆愈。其父聞子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。諸善男子。於意云何。頗有人能。說此良醫。虛妄罪不。不也。世尊。仙言。我亦如是。成仙已來。無量無邊。百千萬億。那由佗阿僧祇劫。為衆生故。以方便力。言當滅度。亦無有能。如法說我。虛妄過者。爾時世尊。欲重宣



# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

8日

友引 畢

旧12月9日

水曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

我がとくぶつらい  
自我得仏来

むりようひやくせんまん

しよきようしよこつしゆう  
所経諸劫数

おくさい あ そうぎ

無量百千万

億載阿僧祇

「久遠のいのちを持つお釈迦さま」

お釈迦さまは、悟りを得て仏と成ってから量り知れない永い寿命を生き、無数の衆生を教え、仏の道に導いて来たと宣言されました。

「百千万億」という実数と「阿僧祇」という想像を超える単位を用いて、無知の凡夫に久遠や永遠という概念を理解させようと、お釈迦さまが苦心されていることがわかります。

お釈迦さまの久遠のいのちの中で、私たちが生かされていると知るのはさらに難しいですね。

# 法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

9

日

先負 齋

旧12月10日

木曜

妙法蓮華經如来寿量品第十六

じようせつぽうきようけ

むしゅおくしゅじよう

常説法教化

無数億衆生

りようにゆうおぶつどう

に らいむりようこう

令入於仏道

爾来無量劫

「常に法を説き衆生を教化し仏道に入らしむ」

「仏道に入らしむ」とは、すべての衆生が仏さまと同じ大慈悲を身につけて他者と接する事ができるようにと導くことです。

衆生がお互いに慈悲を持って接することで安穏な世界「浄土」を築くように導いてきたのです。お釈迦さまは久遠の時をただ生きてきたのではなく、私たちも含めた数限りない衆生を教化し、浄土を維持し続けてきました。その時間が久遠であるということです。

# 法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

10日

仏滅 参

旧12月12日

金曜

妙法蓮華經如来寿量品第十六

為度衆生故

方便現涅槃

而実不滅度

常住此說法

「方便を駆使して導き、常に此に住して法を説く」

お釈迦さまは衆生を仏の世界へと導くために、  
方便（教化の手段）として入滅してみせました。  
しかし実際には、常にここに留まって法を説き  
続けていると説かれています。

「常に此に住して法を説く」とは、この浅ましい  
人間社会が、実はお釈迦さまがお住まいになる  
浄土であるということです。

私たちが目を開いていないために、それに気づ  
くことができないというのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

11日

鏡開き

大安 井

旧12月13日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

が じょうじゅうおし

我常住於此

りようてんどうしゅじょう

い しよじんずうりき  
以諸神通力

すいごんにふけん

令顛倒衆生

雖近而不見

「顛倒の衆生にはあえて姿を見せない」

お釈迦さまは常にこの世界に留まっているのですが、煩惱にまみれ迷う衆生には、あえて姿が見えないようにしていると説かれています。

「顛倒」とは、悩み苦しみのなかで正しい判断ができなくなり、ものごとが逆さまに見えてしまう状態のことです。

真実の教えを説いても正しく理解できないのなら、特別な方法を講じなければなりません。それが入滅という手段なのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

12日

赤口 鬼

旧12月13日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

しゆけんがめつど

衆見我滅度

こうくようしやり

広供養舍利

げんかい え れんぼ

咸皆懷恋慕

にしよかつごうしん

而生渴仰心

「広く舍利を供養し、咸く皆恋慕を懐いて」

お釈迦さまが入滅した後、人々はその慈悲の大きさを偲び敬い、ご遺骨（仏舍利）を集め、塔を建て供養しました。

お釈迦さまご在世のときには、いつでも教えを請うことできると考えていた人々が、滅後に恋慕の心を起こし、お釈迦さまに会いたいと渴望し、自分も仏になりたいと願ったのです。

「顛倒の衆生」を導くために用いた入滅という手段（方便）が功を奏したのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

13日

成人の日

先勝 柳

旧12月14日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

しゅじょうきしんぷく

しちじきいにゆうなん

衆生既信伏

質直意柔軟

いっしんよくけんぶつ

ふじしやくしんみよう

一心欲見仏

不自惜身命

「質直で柔軟に仏に会うために身命を惜まず」

滅後の衆生は、お釈迦さまの在世に説かれた教えを聞き学ぶうちに信心が深くなってきました。

「質直意柔軟」とは、偏見や我欲もなく素直に教えを受け入れること。我欲があると教えの中に自分のためになるものだけを求め、さらに我欲を膨らませることになってしまいます。

柔軟な心でお釈迦さまに会いたいと一心に求め、我欲から解放され、身命も惜しまない心持ちになったとき、仏と出会うことができるのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

14日

友引 星

旧12月15日

火曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

じ がぎゆうしゆそう

くしゆつりようじゆせん

時我及衆僧

俱出靈鷲山

が じ ご しゆじよう

じようざいし ふめつ

我時語衆生

常在此不滅

「その時こそ靈鷲山に姿を現し衆生に語る」

「靈鷲山」とは、法華経が説かれたインドの靈鷲山という特定の場所を示すのではなく、私たちが住むこの娑婆世界を指しているのです。

身命も惜しまず、一心に仏に会いたいと願う人が住む娑婆世界に姿を現して、いつもそばにいと語りかけてくださるのです。

この娑婆世界が浄土であり、法華経を信仰する人が暮らす場所が靈山浄土であり、そこにお釈迦さまもお住まいなのです。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

自我得仏來	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	常說法教化
無數億衆生	令入於仏道	爾來無量劫	為度衆生故	方便現涅槃
而實不滅度	常住此說法	我常住於此	以諸神通力	令顛倒衆生
雖近而不見	衆見我滅度	広供養舍利	咸皆懷戀慕	而生渴仰心
衆生既信伏	質直意柔軟	一心欲見仏	不自惜身命	時我及衆僧
俱出靈鷲山	我時語衆生	常在此不滅	以方便力故	現有滅不滅
余國有衆生	恭敬信樂者	我復於彼中	為說無上法	汝等不聞此
但謂我滅度	我見諸衆生	沒在於苦海	故不為現身	令其生渴仰
因其心戀慕	乃出為說法	神通力如是	於阿僧祇劫	常在靈鷲山
及余諸住处	衆生見劫尽	大火所燒時	我此土安穩	天人常充滿
園林諸堂閣	種種宝莊嚴	宝樹多花果	衆生所遊樂	諸天擊天鼓
常作衆伎樂	雨曼陀羅華	散仏及大衆	我淨土不毀	而衆見燒尽



# 法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

15日

小正月

先負 張

旧12月16日

水曜

妙法蓮華經如来寿量品第十六

以方便力故  
いほうべんりきこ

現有滅不滅  
げんうめつふめつ

余国有衆生  
よこくうしゅじょう

恭敬信樂者  
くぎようしんぎようしや

我復於彼中  
がぶ おひちゆう

為説無上法  
いせつむじょうほう

汝等不聞此  
によとうふもんし

但謂我滅度  
たんにがめつど

「方便を用い求める者がいれば真実の法を説く」

大勢の人々を導くためには、入滅して見せたり、久遠のいのちを持つことを説くなど、方便と現実を使い分けることが必要です。

この娑婆世界のみなならず、他の仏国土でも、どんな場所でも同じように仏さまは法を説きます。

仏さまの教えを求める人がいれば、そこで真実の教えを説くのです。

入滅したとしても、教えを求める人の心の中に仏さまは生き続けているのです。

# 法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

16日

仏滅 翼

旧12月17日

木曜

妙法蓮華經如来寿量品第十六

が けんしよしゆじよう

もつ ざいお く かい

我見諸衆生

没在於苦海

こ ふ い げんしん

りようご しょうかつごう

故不為現身

令其生渴仰

「苦海にあえぐ衆生が仏の教えを求めらるまで待つ」

私たちは苦しみの海に沈んでいるように見えるとお釈迦さまはおっしゃいます。

苦しみとは不満足のことです。

私たち凡夫は誰しも程度の差はあれ不満を抱え、一つの不満が解消されても、また次の不満が生じてくるものです。

そのため私たちが、自ら仏の教えを求める心が生じるようにと、お釈迦さまは入滅し姿を隠されたのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

17

日

大安 軫

旧12月18日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

いんごしんれんぼ

ないしゆついでせぼう

じんずうりきにようぜ

因其心恋慕

乃出為説法

神通力如是

おあ そうぎ こ じようざいりようじゆせん

於阿僧祇劫

常在靈鷲山

及余諸住处

「恋慕の心が生じたら法を説く」

大勢の人々が仏に救って欲しいと思ひ詰める  
ほどになったら、お釈迦さまは姿を現します。

それが神通力というものです。

阿僧祇劫という非常に永い時間、常に靈鷲山つ  
まりこの娑婆世界にあり、さらに他の仏国土に  
おいても衆生を救い続けているのが、久遠の本  
仏お釈迦さまなのです。

まずは私たちが住むこの娑婆世界を救ってこ  
そ他の仏国土も救うことができます。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

18日

赤口 角

旧12月19日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

しゅじょうけんこうじん

衆生見劫尽

だいかしよしよじ

大火所焼時

がしどあんのん

我此土安穩

てんにんじょうじゅまん

天人常充滿

「劫尽きても此の土は安穩で天人は常に充滿せり」

「劫が尽きる」とは、万物がことごとく壊れ果てるということなのです。

しかしそれは物質的なことに過ぎないのだと、お釈迦さまはおっしゃいます。

お釈迦さまのいのちは永遠であり、物質的な世界が焼け尽きるように見えてもお釈迦さまの国土である娑婆世界は安穩であるというのです。

その世界は天上界の者も人間界の者も、不安なく暮らしている浄土なのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

19日

先勝 亢

旧12月20日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

おんりんしょうどうかく しゅじゅほうしょうごん ほうじゅたけか しゅじょうしよゆうらく

園林諸堂閣

種種宝莊嚴

宝樹多花果

衆生所遊樂

諸天擊天鼓

常作衆伎樂

雨曼陀羅華

散仏及大衆

「仏国土の様相を示す」

宝物で飾られた立派な堂閣が建ち並び、宝樹の園があり、心地よい音楽が奏でられ、天から花が降り注ぐ。それがお釈迦さまの仏国土、この娑婆世界の様相だということです。

慈悲をもって世のため人のために尽くす淨い心を持った人々の住む世界は、災害や不幸な出来事が起きたとしても、お互いに助け合い、淨土を築くことができるということです。

淨土を築くのは私たちだということです。

# 法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

20日

月曜

大寒

友引 氏

旧12月21日

妙法蓮華經如来寿量品第十六

が  
じょうど  
ふ  
き  
我浄土不毀

に  
しゆ  
けん  
しょうじん  
而衆見焼尽

う  
ふ  
しよ  
くのう  
憂怖諸苦惱

に  
よ  
ぜ  
しつじゆ  
うまん  
如是悉充滿

「私たちが住むこの浄土は壊れることがない」

お釈迦さまの浄土であるこの娑婆世界は、いつまでも壊れることがない仏国土であるのに、私たち衆生は苦惱が充滿する中でそれに気づくことができないでいます。

お寺の法要行事で雅楽を奏でたり散華をするのは、私たちが今生きているこの場所がお釈迦さまの浄土であることを皆に気づかせるためでもあるのです。

浄土に住む私たち、その自覚を持ちましょう。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

21日

先負 房

旧12月22日

火曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ぜ しまぎいしゆじよう

是諸罪衆生

か あ そうぎこう

過阿僧祇劫

いあく ごういんねん

以悪業因縁

ふ もんさんぼうみよう

不聞三宝名

「罪の衆生は悪業の因縁の故、三宝の名を聞かず」

「罪の衆生」とは悪事を働いた者ではなく、仏と

なるべき仏性を持っていながら煩惱に囚われて

浅ましい生活をしている私たちのことです。

最初からあきらめていたり、全力を出さずにボー

っと生きていると、仏の教えを求めぬ気持ちも起

きてこないものです。

そうなるといつまでも、仏に出会えず、教えにも

師にも出会えず、いつまでも仏性を開くことがで

きず、罪を重ねてしまうことになるのです。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

俱出靈鷲山	我時語衆生	常在此不滅	以方便力故	現有滅不滅
余國有衆生	恭敬信樂者	我復於彼中	為說無上法	汝等不聞此
但謂我滅度	我見諸衆生	沒在於苦海	故不為現身	令其生渴仰
因其心戀慕	乃出為說法	神通力如是	於阿僧祇劫	常在靈鷲山
及余諸住処	衆生見劫尽	大火所燒時	我此土安穩	天人常充滿
園林諸堂閣	種種宝莊嚴	宝樹多花果	衆生所遊樂	諸天擊天鼓
常作衆伎樂	雨曼陀羅華	散仏及大衆	我淨土不毀	而衆見燒尽
憂怖諸苦恼	如是悉充滿	是諸罪衆生	以惡業因縁	過阿僧祇劫
不聞三宝名	諸有修功德	柔和質直者	則皆見我身	在此而說法
或時為此衆	説仏壽無量	久乃見仏者	為説仏難値	我智力如是
慧光照無量	壽命無數劫	久修業所得	汝等有智者	勿於此生疑
当断令永尽	仏語実不虛	如医善方便	為治狂子故	



# 法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

22日

仏滅 心

旧12月23日

水曜

妙法蓮華經如来寿量品第十六

しよ う しゆく づく

にゆうわ

しちじきしや

諸有修功德

柔和質直者

そっかいけん がしん

ざい し に せつぼう

則皆見我身

在此而說法

「諸々の功徳を修め柔和質直な者に法を説く」

「諸々の功徳を修める」とは、世の為、人の為になる行いを続けることです。

「柔和」とは、争いの元にもなる我執の念がなくなることです。

「質直」とは、己を欺かず、人をも欺かず、真に正しい道を歩んでいくことです。

そのように道に迷わず歩んでいくと、仏さまがいつでもそばで法を説いていることがわかるようになります。

# 法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

23日

大安 尾

旧12月24日

木曜

妙法蓮華經如来寿量品第十六

わくじ いし しゆ せつぶつ じゆむりよう

或時為此衆

説仏寿無量

くないけん ぶつしや

い せつぶつ なんち

久乃見仏者

為説仏難値

「それぞれの機根に応じて法を説く」

諸々の功徳を積み柔和質直な者に対してお釈迦さまは仏のいのちが久遠であることを説き、私たち凡夫もまたその久遠のいのちの中で生かされ、いつかは仏さまと同じ境界にたどり着くことができると励ましてください。いつまでも仏さまに出会うことができない者には、相当な努力がなければ厳しいと激励します。お釈迦さまは、いずれそのうちに解るだろうと甘やかしてはくれないのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

24日

赤口 箕

旧12月25日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

が ち り き に よ ぜ

我智力如是

じゆみようむ しゆこう

え こうしやうむりよう

慧光照無量

く しゆごうしよとく

寿命無数劫

久修業所得

「久しく修行をして得た智慧と寿命」

仏さまの智慧があれば、すべてを見通し正しい判断をできるものです。

その智慧の光に照らされない者はいないほどにすべての衆生を救うものです。

また、仏さまのいのちの永さは無量で果てしない長さです。

久しく修行して、世を救い、人を救ってきた結果として得た寿命は無量の永さを持ちます。

しかし、久遠本仏の寿命はさらに無量なのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

25日

先勝 斗

旧12月26日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

によとう う ちしや

もつと ししようぎ

汝等有智者

勿於此生疑

とうだんりようようじん

ぶつご じっぷ こ

当断令永尽

仏語実不虚

「仏さまのお言葉に偽りはない」

「智慧の有る者」とは、すべての物の存在意義を見極め、努力を惜しまない人のことです。

物事の表面だけを見て解ったつもりになるのではなく、真実を求め突き詰めていけば、世のため人のために尽くす菩薩行に行き着くのです。

「仏語実不虚」とは、疑念を生じることなく、後戻りせず菩薩行に励めば仏に成れるというお釈迦さまのお言葉は真実であり、偽りはないということことです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

26日

友引 女

旧12月27日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

によい ぜんほうべん

如医善方便

いじ おうしこ

為治狂子故

じつざい にごんし

实在而言死

むのう せつこ もう

無能説虚妄

「良医治子の喻え」

「良医治子の喻え」の偈文版の要約です。

医師である父（仏）は、誤って毒を飲み、薬まで毒だと思い込むほど正気を失った子供（衆生）を救うために、実際には生きているのに死んだと伝え、正気を戻させて良薬を飲ませ、あらゆる苦しみから救ったというたとえ話です。

お釈迦さまが入滅をしたのは、医師である父親と同じように衆生を目覚めさせるための方便であり嘘偽りとは違うものなのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

27

日

先負 虚

旧12月28日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

が やく い せ ぶ く しよ く げん しゃ

我亦為世父 救諸苦患者

「お釈迦さまは私たちの父親」

お釈迦さまは「我も亦これ世の父」と、すべての衆生の父であると告げられました。

「父である」という言葉には、世の中のすべての人々を救う立場にあることを意味します。

お釈迦さまと私たちは親子の関係にあり、父親が子供の幸せを願うように、いつでも私たちを救おうと見守ってくださいさっているのです。

自分勝手に不満を膨らませ、親に文句を言う子供になっっていないか、省みてみましょう。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

28日

仏滅 危

旧12月29日

火曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

為凡夫顛倒 實在而言滅

「顛倒の凡夫のために入滅して見せた」

お釈迦さまはいつも私たち衆生のことばかりを  
思い、教え導こうとしてくださっています。

顛倒の凡夫は、悩み苦しみのなかで正しい判断  
ができなくなり、ものごとが逆さまに見えて、真  
実の教えを聞いても正しく理解できません。

そこで実際には父親としてそばにいるのです  
が、入滅という方便を用い、私たちの目を覚まさ  
せようとされたのです。

目覚めてみればその有難さがわかるはずです。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

及余諸住处	衆生見劫尽	大火所燒時	我此土安穩	天人常充滿
園林諸堂閣	種種宝莊嚴	宝樹多花果	衆生所遊樂	諸天擊天鼓
常作衆伎樂	雨曼陀羅華	散仙及大衆	我淨土不毀	而衆見燒尽
憂怖諸苦惱	如是悉充滿	是諸罪衆生	以惡業因縁	過阿僧祇劫
不聞三宝名	諸有修功德	柔和質直者	則皆見我身	在此而說法
或時為此衆	說仙壽無量	久乃見仙者	為說仙難值	我智力如是
慧光照無量	壽命無數劫	久修業所得	汝等有智者	勿於此生疑
当断令永尽	仙語実不虚	如医善方便	為治狂子故	実在而言死
無能說虚妄	我亦為世父	救諸苦患者	為凡夫顛倒	実在而言滅
以常見我故	而生隱恣心	放逸著五欲	墮於惡道中	我常知衆生
行道不行道	随忘所可度	為說種種法	每自作是念	以何令衆生
得入無上道	速成就仙身			



# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

29日

先勝 室

旧1月1日

水曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

いじようけん が こ

にしようきようししん

以常見我故

而生憍恣心

ほういつじやくごよく

だ お あくどうちゆう

放逸著五欲

墮於惡道中

「いつでも会えると思っ  
ていっていると惡道に墮ちる」

いつでもお釈迦さまに会えると思っ  
ていっていると、

仏さまの教えなど特別に有難いものだと思え

ず、驕りの心が生じて勝手気ままに欲望にとら

われ、瞋り・貪り・愚かさの三惡道に陥ってしま

うでしよう。

「親の意見と冷や酒は後で利く」という諺のよ

うに、親の意見は後になると有難いと思うもの、

冷酒は飲みやすい分、酔いが回り粗相をしてし

まうもの、とならぬようご注意を。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

30日

友引 壁

旧1月2日

木曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

が じょうちしゅじょう

ぎょうどうふぎょうどう

我常知衆生

行道不行道

ずいおう しゃか どう

い せつ しゅじゅほう

随応所可度

為説種種法

「お釈迦さまはそれぞれの能力応じて法を説く」

お釈迦さまは常に、誰がどの程度、仏の道を求めているのかを見極めていきます。

ある者は仏の境界に近づいており、ある者は目の前のことに囚われ仏道を求める気持ちさえ起越さずにいるなど、すべてををご承知です。

そのうえで、それぞれに応じて、能力の低い者には浅い所から説き仏道を求める気持ちを起こさせ、能力の高い者には深い教えを説き背中を押して、仏の世界へ導いてくださるのです。

# 法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

1月

31日

先負 奎

旧1月3日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

まい じ き ぜ ねん い が り よう し ゆ じ よう

每自作是念

以何令衆生

とくに ゆ う む じ よ う ど う

そく じ よ う じ ゆ ぶ つ し ん

得入無上道

速成就仏身

「皆が仏と成るまで法を説き続ける」

お釈迦さまは相手の理解力の差によって浅い教えや深い教え説かれましたが、いずれも同じように全力で説き導く姿勢は変わりません。

ですから、お釈迦さまの教えは方便であっても、本心を説いた真実の教えであっても、仏に成るための道筋が丁寧に説かれているのです。

皆が速やかに仏と成り、この娑婆世界が真の浄土となるまでお釈迦さまの教化は続きます。それを忘れず仏道を歩みましょう。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

及余諸住処	衆生見劫尽	大火所燒時	我此土安穩	天人常充滿
園林諸堂閣	種種宝莊嚴	宝樹多花果	衆生所遊樂	諸天擊天鼓
常作衆伎樂	雨曼陀羅華	散仏及大衆	我淨土不毀	而衆見燒尽
憂怖諸苦惱	如是悉充滿	是諸罪衆生	以惡業因縁	過阿僧祇劫
不聞三宝名	諸有修功德	柔和質直者	則皆見我身	在此而説法
或時為此衆	説仏壽無量	久乃見仏者	為説仏難値	我智力如是
慧光照無量	壽命無數劫	久修業所得	汝等有智者	勿於此生疑
当断令永尽	仏語実不虛	如医善方便	為治狂子故	実在而言死
無能説虚妄	我亦為世父	救諸苦患者	為凡夫顛倒	実在而言滅
以常見我故	而生隱恣心	放逸著五欲	墮於惡道中	我常知衆生
行道不行道	随忘所可度	為説種種法	每自作是念	以何令衆生
得入無上道	速成就仏身			